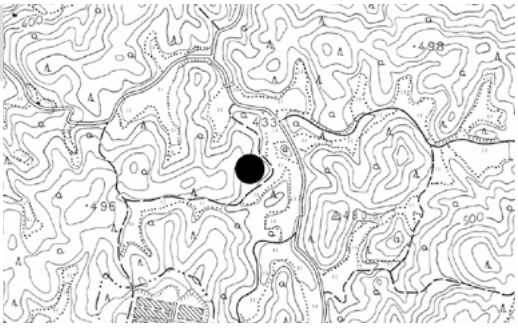
トヨガ下（した）遺跡

所　在　地　豊田市下山田代町トヨガ下
（北緯35度15分7秒 東経137度14分46秒）
調 査 理 由　豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業
調 査 期 間　平成25年10月～平成25年12月
調 査 面 積　3,000㎡
担　当　者　鈴木正貴・武部真木・小澤一弘



調査地点（1/2.5万「東大沼」）

調査の経過　調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発用地施設造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて実施した。調査期間は平成25年10月から12月であり、13A区・13B区の２つの調査区について、計3,000㎡の面積の調査を行った。

立地と環境　遺跡は、豊田市下山田代地内にて郡界川に合流する沖川の左岸丘陵部に位置している。13A区は昨年度調査の12B区西に隣接する南向きの緩斜面であり、標高は約437～440mを測る。13B区は谷を挟んで13A区の対岸にあたる標高444～450mの丘陵上である。

調査の概要　13A区では縄文土器包含層と古代の遺物を含む旧流路（013NR）を確認した。

基本層序は、上から表土（腐植土）、しまりの弱い黄灰色砂質シルト層、黒色砂質土～シルト層の順の堆積がみられ、風化花崗岩の基盤層に達する。縄文土器は浅い谷状地形を埋めるように堆積する黒色土層の上位に含まれており、自然地形の凹みと思われる054SKと周辺の斜面に前期・後期の土器小片が散漫に分布するといった状況であった。自然流路（013NR）は、昨年度に左岸域（12B区007NR）を調査し、今回は右岸と流路の大部分を調

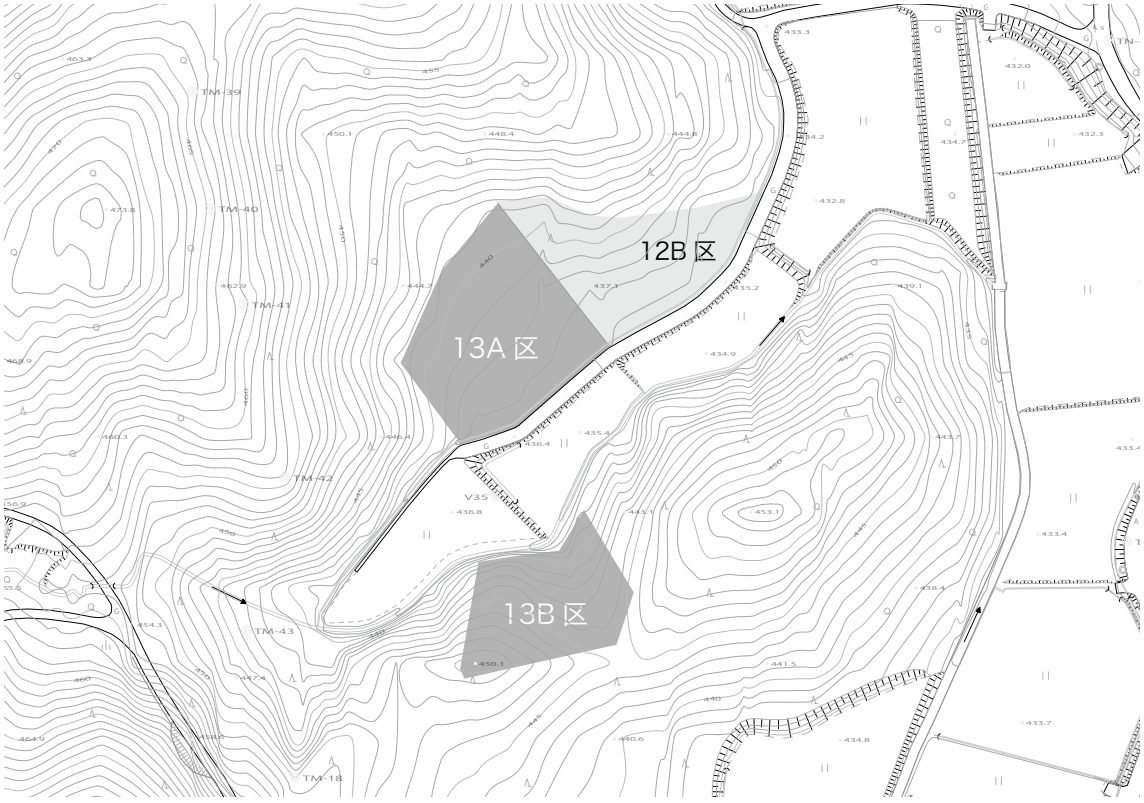


図１　トヨガ下遺跡 調査区位置図（1:2,000）

査した。出土した灰釉陶器には碗・皿、小瓶類があり、埋土の上層と下層で黒笹90号窯式から折戸53号窯式期に比定されるものがみられ、上流から流れ込み再堆積した状況がうかがわれる。灰釉陶器碗では2点の墨書が含まれるほか、土師器甕と数点の木製品（板状）が出土している。

13B区の主な遺構は、調査区西寄りの尾根上平坦面でピット状の土坑（015SK）ほか土坑数基がある。遺物をともなわず時期は不明であるが、調査区東寄りの尾根付近で検出された陥穴（030SK）は、検出面で1.2×0.9m、深さ0.83mの規模をもち、ほぼ平坦な底面の中央に直径約15cm、深さ約0.3mのピット1基が認められた。遺物では調査区西寄りの尾根上を中心に、少量ながらも縄文土器と磨石（1点）が出土している。

そのほか近代以降の炭焼窯（炭焼跡を含む）と思われる遺構は、両調査区で計11基を検出した。このうち13A区010SYは、花崗岩の岩盤の一部を削り込み、その内側に造られている。焼成室内側で長軸方向1.3m、幅0.8m、側壁の残存高1.1mの規模をもち、煙道部と側壁は石積み、底面は二重の石敷の構造となっている。出入口前方の作業スペースと思われる辺りには焼土と炭化物の混じる土坑が確認された。

ま と め

13A区付近では縄文時代前期・後期の土器が見つかり、13B区は陥穴が作られる環境にあったことが確認できた。具体的な居住域の推定に結びつく情報は少なく、下山地区の縄文時代の様相を考えるには、現状の遺跡（調査）範囲の括りよりも広い範囲を対象とした地形復元との検討から進められる必要があろう。

古代については、昨年度検出された土器と焼土を含む土坑等の遺構が今回は検出されていない。同様の緩斜面地形であったにも拘らず、谷奥側の流路の対岸域では活動の痕跡が希薄であった。ただ遺物の出土状況からは、さらに上流部にかけての範囲が中心的な活動域であったと推定される。（武部真木）

トヨガ下遺跡遠景（東から）

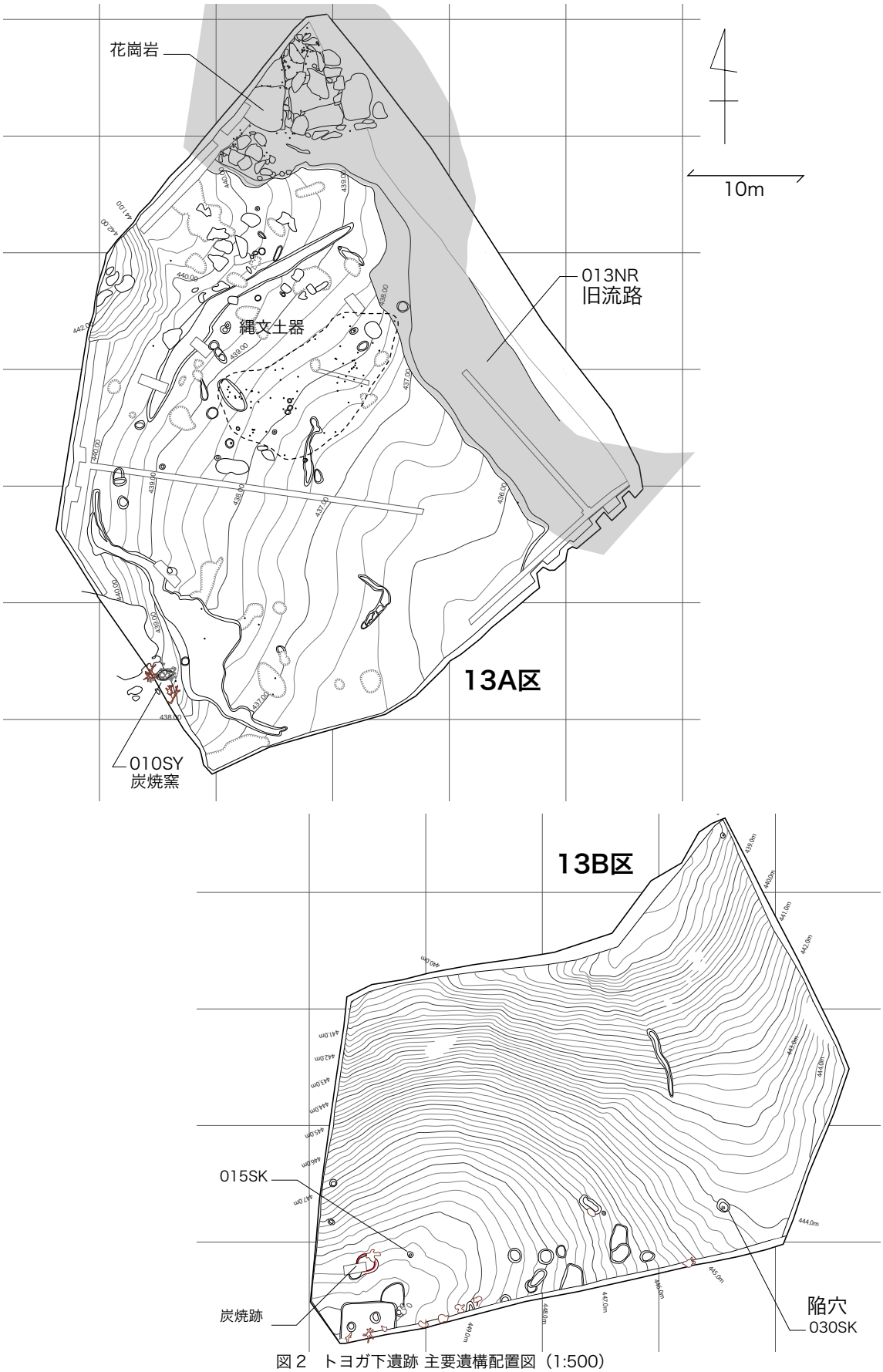


図２　トヨガ下遺跡 主要遺構配置図（1:500）

13B区全景（西から）

13B区030SK（北から）

13B区 西部完掘状況（西から）

13B区030SK断割り（北から）

13A区全景（南から）

13A区013NR遺物出土状況（南から）

13A区縄文土器出土状況

13A区013NR出土の墨書灰釉陶器碗